

高麗版禅籍と宋元版

一 高麗版禅籍所在目録初稿

一〇世紀の初頭（九四一）、朝鮮半島を統一した高麗は、一四世紀末（一三九二）に滅亡するまでの四世紀半にわたり、その国名を世界史の上にとどめる。今日、Korea をはじめ、欧米における半島の呼称名の多くが高麗の音写であることは、この国の歴史と栄光をものがたる。

しかし、その長い統一国家は、決して無事安穩な体制ではなく、後期における元軍による侵略とそれへの従服、日本遠征への助戦、倭寇への侵害対応や反元運動など、絶えず内外の戦乱にゆさぶられた激動の時代であった。

かかる多難な王朝にもかかわらず、仏教界は空前の繁栄をとげる。それは、乱世なればこそ国家をあげて崇仏を奉じ、王侯貴族が競って仏教に帰依したからにほかならぬ。あたかも、二回にわたる大蔵経の雕造という国家的大事業にそれは

象徴的であり、麗末には曹溪宗をはじめとする仏教一二宗が覇を競っていたといわれる⁽¹⁾。

高麗一代は、大陸の五代から明初までに相当する。文化史的な視野からみれば、それは印刷文化の興起・発達の時代と、ちょうどかさなる。世界最初の鑄印活字を生んだ高麗独自の技術と崇仏という背景が、仏教書籍の刊行への関心の高まりをうながし、やがて拍車をかけたのは自然のなりゆきであった。

世に「高麗版」と称する典籍は、かならずしも高麗時代の旧槧のみを指すのではなく、のちの李朝以降における摺刷をも指すことが多いのは、その大型で豪華な書物が、朝鮮出版文化の精華としての代名詞が与えられるにふさわしいからであった。知るごとく、文字どおりの高麗旧槧はきわめて少なく、その大部分は仏典である。

残存する仏典類は、たんに希少価値のみならず、テキスト

椎 名 宏 雄

としての資料的価値が大きい。いま、禅籍類にかぎっていえば、宋元版や五山版とならんで、その価値は絶大である。

したがって、筆者は古版禅籍研究の一環として、高麗版禅籍に強い関心をいだくものである。以下、これまでに知りえた旧槧類の所在をまとめ、その文献的な特徴、ひいては宋元版との関係について言及したいと思う。もとより、この目録は筆者の目撃しえた狭い範囲にすぎず、今後、識者の御叱正によって補訂してゆきたい。



凡 例

一、以下は、高麗版の禅籍を版行と所蔵者の別に掲載した。時代は、便宜上、高麗建国から一四世紀末までを収録した。

一、禅籍名は、原則として原典名に準じ、五十音順に排列した。ただし、便宜上、通称名を用いた場合もある。

一、版行の別は①②等で区別し、刊行年・刊行者・巻冊数等を記載した。大蔵経中の函字は「ハ」で示した。

一、所蔵者は①②等で区別し、現所蔵者が未確認の場合は旧蔵者名を記載した。

一、個々の典籍に関する影印・写真、書誌的解題・論文等を末尾に掲載した。これらが皆無の場合は、著録される典拠を掲載した。典拠の記載は、初出の場合のみを詳細とした。

高麗版禅籍と宋元版（椎名）

1 円覚道場礼懺禅観等事

唐、圭峰宗密撰

①（覆宋高麗版）、零本存二卷（卷一五・一六）一冊

①大屋徳城旧蔵

論文に、大屋徳城「高麗朝の旧槧」（『積翠先生華甲寿記念論纂』、昭和一七年八月刊）がある。

2 円鑑国師歌頌

高麗、忘庵撰、真罔編

①忠烈王二三年（一二九七）刊、一卷

①京城帝大旧蔵

『朝鮮仏教典籍展覧会目録』（昭和九年五月、京城帝大仏教青年会編刊）、及び大屋徳城「高麗朝の旧槧」に著録・紹介されるが、東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（昭和五七年八月、国書刊行会刊）によれば、本書は佚書とされている。

3 誠初心学人文

高麗、知訥撰

①高宗二〇年（一二三三）、陝川海印寺刊、合卷一冊（発心

修行章・自警文・仏説像法滅義經・仏説北斗七星延命經、と合冊）

① 韓国国立中央図書館

韓国国会図書館司書局参考書誌課編『韓国古書綜合目録』（一九六八年、韓国国会図書館刊）p. 715 に著録。

4 景德伝燈録

北宋、道原撰、三〇巻

① 高麗、恭愍王二十一年（一三三二）重刊、広明寺・開天寺・

堀山寺・伏巖寺共同開板、一〇冊

① 高麗大学校中央図書館（零七冊）、② 李王家旧蔵

開板については、韓国図書館学研究会編『韓国古印刷文化史』（日本語版、一九七八年五月、京都同朋社刊）p. 66 に著録される。①は『韓国古書綜合目録』p. 23a、②は『李王家蔵書閣古図書目録』（昭和一〇年一〇月、京城鮮光印刷刊）に各著録。

5 悟性論・晦堂録

①（高麗刻本）、合一冊

① 京都

大屋徳城「高麗朝の旧槩」の紹介せる書。一宙より竜華院第二世月漢に付与したもの。現所蔵者名は不詳。

6 護法論

北宋 張商英撰

① 高麗、禰王五年（一三七九）重刊、忠州青竜寺板、一卷一冊

① 大屋徳城

② 禰王五年（跋）刊、一卷一冊

① 韓国国立中央図書館

①は大屋徳城「高麗朝の旧槩」、及び黒田亮「高峰禅要・沙門永中及び護法論」（『朝鮮旧書考』、昭和一五年一月、東京岩波書店刊）に紹介。②は韓国国立中央図書館編刊『国立中央図書館善本解題』I（一九七〇年）p. 86 に著録。

7 高峰和尚禅要

元、高峰原妙撰、持正・洪喬祖共編

① 至元三十一年（一二九四）刊、一卷一冊

① 焼津市旭伝院岸沢文庫、② 積翠軒文庫旧蔵

② 至正一八年（一三五八）、呉郡集雲精舎刊、一卷一冊

① 伊勢修成旧蔵、② 弘文荘

③明、建文元年（一三九九）重刊、智異山徳奇寺門板、一卷
一冊

①韓国国立図書館

①の①は『岸沢文庫蔵書目録』（近代写）及び駒沢大学図書館編刊『^{新纂}禅籍目録』（昭和三七年六月、東京）に各著録。
②はともに『^{新纂}禅籍目録』の著録。③は韓国国立中央図書館刊編刊『古書目録』1（一九七〇、ソウル）p.73bに所説される。②の重刊本。

8 金剛経川老註

南宋、冶父道川頌^並著語

①明、洪武二〇年（一三八七）重刊、三卷一冊

①在山楼、②東洋文庫

①は前間恭作編『古鮮冊譜』一（昭和一九年四月、東京東洋文庫刊）、p.593aに解題を掲載。②は東洋文庫編『増補東洋文庫朝鮮本分類目録』（昭和五四年三月、東京、国立国会図書館刊）p.65aに著録。

9 慈覚禅師語録

北宋、宗蹟撰、祖大・普式・法瓊・景福・道浹編

高麗版禅籍と宋元版（椎名）

①北宋、大観三年（一一〇九）入序V刊、上中下三卷三冊
①亜細亜問題研究所六堂文庫

『韓国古書綜合目録』p.598aに著録。大屋徳城「高麗朝の旧契」では京城の崔南善氏の所蔵として紹介されるが、後に六堂文庫の所蔵となったのであろう。他に伝本の知られぬ天下唯一の貴重書。

10 首楞嚴経要解

北宋、戒環解

①高麗、高宗二二年（一二三五）刊、一〇卷一冊

①ソウル大

②元、至大二年（一三〇九）刊、一〇卷六冊

①岸沢文庫

①はソウル大学校附属図書館編『ソウル大学校開校二十周年記念貴重図書展示会展示図書目録』（一九六六年一〇月、ソウル大学校出版部刊）に解題を収録。②は『禅籍目録』の著録。

11 宗門摭英集

北宋、性簡編、三卷

①高麗、高宗四一年（一二五四）、分司大藏都監重刊

①趙明基

趙明基「宗門摭英集」（『中外日報』昭和五七年一月七日号）なる第五回國際仏教學術會議の發表要旨として紹介。天下の孤本。

12 宗鏡撮要

宋、永明延寿撰、心聞曇賁編

①高麗、康宗二年（一二二三）刊、曹溪山修禪寺板、一卷一冊

①東国大、②六堂文庫

開板に関しては、『韓国古印刷史』p. 66に紹介。①②ともに『韓国古書綜合目録』p. 640に著録。

13 宗鏡錄

宋、永明延寿撰

①高麗、高宗三三～三五年（一二四六～八）、南海分司大藏經都監刊、高麗版大藏經再彫本補板「録々茂」所収本、一〇〇卷

①海印寺（板木共）、②駒沢大（二二冊）

影印が『高麗大藏經』第四四卷（一九七六年四月、ソウル東国大学校出版部刊）に所収される。論文に、大屋徳城『朝鮮海印寺経板攷』（昭和五年刊）がある。

14 禪苑清規

北宋、宗蹟撰

①高麗、高宗四一年（一二五四）刊、分司大藏經都監重彫、一〇卷一冊

①東京泉岳寺

論文は、大屋徳城「高麗板重添足本禪苑清規」（『書物同好会会報』一七、昭和一七年九月。同覆刻本、昭和五三年八月、東京竜溪書舎刊）、同「高麗朝の旧契」、小坂機融「金沢文庫本『禪苑清規』と高麗版『禪苑清規』との関連について」（『金沢文庫研究』一八一四、昭和四七年四月）、がある。また、鏡島元隆・佐藤達玄・小坂機融共著『訳註禪苑清規』（昭和四七年七月、曹洞宗宗務庁刊）の口絵に本書の巻首と巻尾の写真二葉、及び解題を掲載。

15 禪門拈頌集

高麗、永乙慧湛・真訓等編

①高宗二〇年（一二三三）刊、逸庵居士鄭晏誌

① 李秉直

② 高宗三一（三五年）（二二四）八（南海分司大藏經都監）

刊、高麗版大藏經再彫本補板〔邈・巖・岫〕所収本、三

〇卷三〇帖

① 海印寺（板木共）、東国大（二〇冊）

③（高麗末）刊、

① 韓国国立中央図書館（零本）卷二二〇一冊

①は李聖儀・金約瑟共編『羅麗芸文志』（一九六四年、ソウル刊）p.152に著録。②は影印が『高麗大藏經』第四六巻に収録され、同第四八巻中に解題を収める。論文は大屋徳城「朝鮮海印寺経板攷」がある。③は韓国国立中央図書館編刊『古書目録』4（一九七三、ソウル）に著録。

16 禅林宝訓

南宋、浄善重集

① 北元、宣光八年（一三七八）入跋▽刊、忠州青竜寺刻、上

下二卷二冊

① ソウル大、② 趙明基、③ 華山、④ 北京図書館、⑤ 東洋

文庫、⑥ 稲葉岩吉

①②③及び書誌は、『韓国古書綜合目録』p.347に所載。

高麗版禅籍と宋元版（椎名）

③は『北京図書館善本書目』（一九五九年、北京中華書局刊）

子部下、釈家類、22aに著録。④は『増補東洋文庫朝鮮本分

類目録』p.68aに著録。⑤に関する論文に、稲葉岩吉「高麗

宣光版禅林宝訓書後」（『青丘学叢』八、昭和七年五月）、及

び大屋徳城「高麗朝の旧契」がある。

17 祖堂集

五代、静・筠共編

① 高麗、高宗三二年（二二四五）、南海分司大藏經都監刊、高

麗版大藏經再彫本補板〔曠・遠〕所収本、二〇卷二〇帖

① 海印寺（板木共）、② 韓国国立中央図書館、③ 駒沢大

（二部）、④ 花園大、⑤ 松ヶ岡文庫、⑥ 関市竜泰寺、⑦ 趙

明基

影印に五種がある。（一）『暁城趙明基博士華甲記念仏教史学

論叢』（一九六五年、東国大学校刊）附録、（二）『祖堂集』（一

九七二年七月、京都中文出版刊）、（三）『祖堂集』（同年九月、

台北広文書局刊）、（四）『高麗大藏經』第四五巻（一九七六年

五月、東国大学校出版部刊）、（五）聖田聖山編『祖堂集索引』

下冊（一九八四年二月、京大人文科学研究刊）所収。

論文は、大屋徳城「朝鮮海印寺経板攷」以下、少なくない

が、柳田聖山編『祖堂集索引』下冊に収める「祖堂集」解題

は、従来の成果を集大成したものである。

18 大慧普覚禅師書

北宋、大慧宗果撰

- ①明、洪武二〇年（一三八七）△跋▽刊、高達山仏寺時板、一卷一冊

①天理図書館、②大塚燈

①の解題は、川瀬一馬編『石井積翠軒文庫善本書目』本文篇（昭和一七年一〇月、東京凸版印刷刊。同覆刻本、昭和五年五月、京都臨川書店刊）p.224、及び『天理図書館稀書目録』和漢書之部第三（昭和三五年一〇月、天理図書館刊）p.99aに所載され、『石井積翠軒文庫善本書目』図録篇に本書の巻首と巻末の写真半葉ずつを掲載。②は黒田亮『朝鮮旧書考』（昭和一五年一二月、東京岩波書店刊）p.160～161に紹介される。

19 大蔵一覽

南宋、陳実編

- ①高麗刊、高麗版大蔵経再彫本補板〔緜〕所収本、一〇巻
①海印寺（板木共）

影印が『高麗大蔵経』第四五巻に所収。論文は大屋徳城「朝鮮海印寺経板攷」。

20 南明泉和尚証道歌事实

高麗、瑞竜禅老連公撰

- ①高麗、高宗二六年（一二三九）刊、鑄字覆刻、三巻一冊
①韓国国立中央図書館

②高宗三四～三五年（一二四七～八）、南海分司大蔵経都監刊、高麗大蔵経再雕本補板〔庭〕所収本、三巻

①海印寺（板木共）

①は韓国国立中央図書館編刊『古書目録』3 p.64aに著録され、同図書館の『善本解題』Iに解題と巻首の写真一葉を掲載する。また、『韓国古印刷文化史』の口絵にも本書の巻首写真一葉を掲載。

21 人天眼目

南宋、晦巖智昭編

- ①高麗、恭愍王六年（一三五七）、大聖寿慶禅寺刊、上中下三巻三冊
①東洋文庫（零本巻上一冊）

②明、洪武元年（一三六八）△跋▽刊、六巻一冊

①崔南善旧蔵

③洪武二八年(一三九五)刊、檜巖寺板、三卷三冊

①韓国国立中央図書館(零本、卷上一冊)、②積翠軒文庫旧蔵

①は『増補東洋文庫朝鮮本分類目録』p.66に著録。②は

大屋徳城「高麗朝の旧槧」に紹介。③の①は、『国立中央図書館善本解題』1 p.92~93に解題、及び巻首の写真一葉を掲載。②は『石井積翠軒文庫善本書目』本文篇p.224~5に解題、及び同図録篇に巻首の写真一葉を掲載する。

論文には、岩井大慧「麗板『人天眼目』とその種々板考」(『和田博士古稀記念東洋史論叢』、昭和三六年刊)、椎名「『人天眼目』の諸本」(『宗学研究』二〇、昭和五三年三月刊)がある。

22 人天宝鑑

南宋、曇秀編

①元、至元二七年(一二九〇)刊、二卷一冊

①海印寺(板木共)、②韓国国立中央図書館

②は『古書目録』1 p.97aに著録。①の奥書部分の写真

一葉が、今西竜『高麗及李朝史研究』(昭和四九年一月、

高麗版禅籍と宋元版(椎名)

東京国書刊行会刊)の口絵に掲載。

23 白雲和尚語録

高麗、白雲景閑撰、釈璨編

①北元、宣光八年(一三七八)刊、川寧鷲岩寺板、上下二卷一冊

①韓国国立中央図書館、②ソウル大、③鄭眺震

影印は、京城大法文学部編刊『白雲和尚語録』二卷二冊昭和九年三月影印、高橋亮の解説付)がある。①②は『韓国仏書解題辞典』p.135に著録され、③は京城帝国大学仏教青年会編刊『朝鮮仏教典籍展覧会目録』(昭和九年、ソウル)に著録。論文は、大屋徳城「高麗朝の旧槧」、江田俊雄「高麗版白雲和尚語録に就いて」(『宗教研究』新一〇―五、昭和八年九月刊、『朝鮮仏教史の研究』△昭和五二年一〇月、東京国書刊行会刊▽所収)、等がある。

24 白雲和尚抄録仏祖直指心体節要

高麗、白雲景閑編

①北元、宣光七年(一三七七)刊、清州牧外興徳寺鑄字印施、上下二卷二冊

①フランス国立図書館(零本、卷下一冊)

- ② 宣光八年(一二三七八)刊、川寧鷲巖寺板、上下二卷一冊
- ① 韓国国立中央図書館

- ① 高麗、忠肅王四年(一二三二七)刊、一〇卷四冊
- ① 亜細亜問題研究所六道文庫

①の影印が、韓国文化公報部文化管理局により一九七三年、千恵鳳の解題を付して刊行され、『韓国古印刷史』p. 80には写真二葉が掲載。解題に、Courant, Maurice, 'Bibliographie Coreen', Paris, Ernest Leroux, 1984『韓国古印刷史』p. 75~81がある。②は『古書目録』2 p. 963bに著録。

①は京城帝国大学『朝鮮仏教典籍展覽会目録』(昭和九年)では崔南善の蔵書とされていたが、『韓国古書綜合目録』では六道文庫の所蔵。

25 仏祖三経

南宋、大洪守遂注

- ① 至正二二年(二三六一)重刊、全州円巖寺板、三卷一冊
- ① 韓国国立中央図書館、㊦高麗大、㊧清芬室(李仁榮)、
- ③ 李謙魯、㊨趙明基、㊩東京大阿川文庫、㊪成實堂文庫
- ② 高麗、禩王一〇年(一二三八四)入跋▽刊、一卷一冊
- ① 趙明基、㊫閔永珪

- ① 南宋、宝祐四年(一二五六)、靈淑重刊、一卷一冊
- ① 黒田亮
- ② 元、延祐三年(一二二六)、秋谷刊、一卷一冊
- ① 大屋徳城旧蔵
- ③ 元、至正元年(一二四一)刊、天宝山檜巖寺板、一卷一冊
- ① 李王家旧蔵

27 法宝壇経

唐、慧能撰

①は『国立中央図書館善本解題』I p. 73~74に解題、『古書目録』1に著録。②は『韓国古書綜合目録』p. 296aに著録。

26 碧巖録

北宋、雪竇重頌頌古・圓悟克勤評唱

①は黒田亮「六祖壇経考補遺」(『積翠先生華甲寿記念論纂』(昭和一七年八月、東京凸版印刷刊)に紹介。②は、花園大学『禅学研究』第二三三号(昭和一〇年七月刊)に「元延祐高麗刻本六祖大師法宝壇経」として本書の翻刻及び写真、同じく「元延祐高麗刻本六祖大師法宝壇経に就て」なる大屋徳城の論文を掲載。③は『禅籍目録』の著録。

28 懶翁和尚歌頌

高麗、懶翁慧勤撰・覚宏録

①高麗、恭愍王一二年（一三六三）刊、一卷二冊

① 鮎貝房之進（語録と合冊）

② 禩王五年（一三七九）入序▽刊、一卷一冊

①ソウル大、㊦趙明基

①の①は大屋徳城「高麗朝の旧槧」に解題を収録。①の影印に京城帝大刊本（昭和五年三月）がある。②は『韓国古書綜合目録』p.116に著録。

29 懶翁和尚語録

懶翁慧勤撰、覚璉編、幻菴混修校正

①高麗、恭愍王一二年（一三六三）刊、一卷二冊

① 鮎貝房之進

② 禩王五年（一三七九）入序▽刊、一卷一冊

①ソウル大、㊦趙明基

①の影印に京城帝大刊本（昭和五年三月）がある。②は東国大学校仏教文化研究所『高麗仏書展観目録』（一九六四年、ソウル刊）に著録。解題には大屋徳城「高麗朝の旧槧」がある。

二 中国禅籍開板上の特徴

右に掲げた所在目録は、わずか二九種四五版であり、実際に高麗朝で刊行されたおびただしい禅籍中の、質量ともに暁天の星にすぎないであろう。しかし反面、高麗末期以降、今日にいたるまでの半島における激動の歴史を経て、なおこれだけの旧槧をとどめていることを、われわれはよろこばねばならぬ。

右の目録中、中国撰述書は二一種、高麗撰述書は八種である。いま、筆者の当面の関心である宋元版との関係からして、中国撰述書のみを問題としたい。

おどろくべきは、右の二一種の約半数に相当する『金剛経川老註』『慈覚禅師語録』『首楞嚴経要解』『宗門拈英集』『宗鏡撮要』『禅林宝訓』『祖堂集』『大蔵一覽』『人天宝鑑』『仏祖三経』の一〇種が、現存する世界最古の刊本だということである。しかも、その中であって、『慈覚禅師語録』『宗門拈英集』『祖堂集』の三書は、他にまったく伝本の知られぬ、まさしく天下唯一の珍籍にほかならない。ちなみに、宋元版・五山版の現存禅籍約一八〇種中、天下の孤本は『鏡堂和尚語録』一点にすぎぬ。かくして、現存高麗版禅籍は、質的に絶大な価値を有することは明らかである。

つぎに、高麗版中国禅籍の年代別の開板状況や開板者は、

どのようなであったであろうか。これをみるため、現存本以外にも刊行年時の知られる数点の禅籍をくわえて作成したのが、以下の刊行年表である。ちなみに、黒田亮氏が『朝鮮旧書考』において、高麗以降の五〇〇年間の「朝鮮仏書年表」を作成されているが、数量的にも少なく、五〇年単位に仏典名だけを配したものにすぎない。

高麗版中国禅籍刊行年表

No.	刊行年	禅籍名	開板者	版別	典拠	所在目録
(1)	泰和7 (1207)	法宗宝鏡壇撮要	曹溪山修禅寺		知訥跋記	12
(2)	康宗2 (1213)	法宗宝鏡壇撮要	"		刊	10—①
(3)	高宗22 (1235)	法宗宝鏡壇撮要	南海分司大藏都監		刊	17
(4)	" 32 (1245)	法宗宝鏡壇撮要	"		"	13
(5)	" 33~35(1246~8)	法宗宝鏡壇撮要	"		"	11
(6)	" 41 (1254)	法宗宝鏡壇撮要	"	重刊	"	14
(7)	宝祐2 (1254)	法宗宝鏡壇撮要	曹溪山修禅寺		晦堂安基跋記	27—①
(8)	" 4 (1256)	法宗宝鏡壇撮要	伽椰山海印寺		刊	22
(9)	至元27 (1290)	法宗宝鏡壇撮要		覆元版		7—①
(10)	" 31 (1294)	法宗宝鏡壇撮要				
(11)	大徳4 (1300)	法宗宝鏡壇撮要			万恒跋	10—②
(12)	大祐2 (1309)	法宗宝鏡壇撮要			刊	?
(13)	大祐3 (1316)	法宗宝鏡壇撮要		重刊	刊	27—②
(14)	肅宗4 (1317)	法宗宝鏡壇撮要			刊	26
(15)	正1 (1341)	法宗宝鏡壇撮要	天宝山正慶寺		跋	27—③
(16)	正2 (1341)	法宗宝鏡壇撮要	小伯山正慶寺		刊	記
(17)	惠王6 (1357)	法宗宝鏡壇撮要	大聖寿集精舍		刊	21—①
(18)	正18 (1358)	法宗宝鏡壇撮要	吳郡集雲精舍	重刊	"	7—②

No.	刊 行 年	禅 籍 名	開 板 者	版 別	典 拠	所在目録
(19)	正21 (1361)	至 仏 祖 三 經 洪 人 天 眼 目	全 州 円 覚 寺 宝 山 檜 殿 寺 明 寺・開 天 寺 山 州 伏 殿 寺 忠 州 竜 寺	重 刊	刊 李 稽 跋 記	25—① 21—②
(20)	武 1 (1368)	至 洪 祖 三 經 洪 人 天 眼 目	全 州 円 覚 寺 宝 山 檜 殿 寺 明 寺・開 天 寺 山 州 伏 殿 寺 忠 州 竜 寺	重 刊	刊 李 稽 跋 記	25—① 21—②
(21)	王21 (1372)	恭 愍 德 伝 燈 宣 王 林 宝 録	全 州 円 覚 寺 宝 山 檜 殿 寺 明 寺・開 天 寺 山 州 伏 殿 寺 忠 州 竜 寺	重 刊	刊 李 稽 跋 記	4
(22)	光 8 (1378)	宣 光 法 宝 訓 禪 護 宗 永 嘉 論	全 州 円 覚 寺 宝 山 檜 殿 寺 明 寺・開 天 寺 山 州 伏 殿 寺 忠 州 竜 寺	重 刊	刊 李 稽 跋 記	16
(23)	王 5 (1379)	禪 護 宗 永 嘉 論	全 州 円 覚 寺 宝 山 檜 殿 寺 明 寺・開 天 寺 山 州 伏 殿 寺 忠 州 竜 寺	重 刊	刊 李 稽 跋 記	6
(24)	7 (1381)	禪 護 宗 永 嘉 論	全 州 円 覚 寺 宝 山 檜 殿 寺 明 寺・開 天 寺 山 州 伏 殿 寺 忠 州 竜 寺	重 刊	刊 李 稽 跋 記	6
(25)	10 (1384)	禪 護 宗 永 嘉 論	全 州 円 覚 寺 宝 山 檜 殿 寺 明 寺・開 天 寺 山 州 伏 殿 寺 忠 州 竜 寺	重 刊	刊 李 稽 跋 記	25—②
(26)	武20 (1387)	洪 剛 經 川 老 經 武 剛 普 覺 師 註	全 州 円 覚 寺 宝 山 檜 殿 寺 明 寺・開 天 寺 山 州 伏 殿 寺 忠 州 竜 寺	重 刊	刊 李 稽 跋 記	8
(27)	20 (1387)	洪 大 慧 普 覺 師 註 武 大 慧 普 覺 師 註	全 州 円 覚 寺 宝 山 檜 殿 寺 明 寺・開 天 寺 山 州 伏 殿 寺 忠 州 竜 寺	重 刊	刊 李 稽 跋 記	18
(28)	28 (1395)	建 人 天 尚 禪 要 高 峰 和 尚 禪 要	全 州 円 覚 寺 宝 山 檜 殿 寺 明 寺・開 天 寺 山 州 伏 殿 寺 忠 州 竜 寺	重 刊	刊 李 稽 跋 記	21—③
(29)	文 1 (1399)	建 人 天 尚 禪 要 高 峰 和 尚 禪 要	全 州 円 覚 寺 宝 山 檜 殿 寺 明 寺・開 天 寺 山 州 伏 殿 寺 忠 州 竜 寺	重 刊	刊 李 稽 跋 記	7—③
(30)	麗 朝	高 円 覚 道 場 札 鐵 禪 觀 等 事 録 高 性 論 暉 堂 語 録	全 州 円 覚 寺 宝 山 檜 殿 寺 明 寺・開 天 寺 山 州 伏 殿 寺 忠 州 竜 寺	重 刊	刊 李 稽 跋 記	1
(31)	麗 朝	高 性 論 暉 堂 語 録	全 州 円 覚 寺 宝 山 檜 殿 寺 明 寺・開 天 寺 山 州 伏 殿 寺 忠 州 竜 寺	重 刊	刊 李 稽 跋 記	5
(32)	麗 朝	高 性 論 暉 堂 語 録	全 州 円 覚 寺 宝 山 檜 殿 寺 明 寺・開 天 寺 山 州 伏 殿 寺 忠 州 竜 寺	重 刊	刊 李 稽 跋 記	9
(33)	麗 朝	高 性 論 暉 堂 語 録	全 州 円 覚 寺 宝 山 檜 殿 寺 明 寺・開 天 寺 山 州 伏 殿 寺 忠 州 竜 寺	重 刊	刊 李 稽 跋 記	9
(34)	麗 朝	高 性 論 暉 堂 語 録	全 州 円 覚 寺 宝 山 檜 殿 寺 明 寺・開 天 寺 山 州 伏 殿 寺 忠 州 竜 寺	重 刊	刊 李 稽 跋 記	19

右の表は、もとより完全なものではないが、すくなくとも高麗における中国禅籍に対する、おおよその状況を知ることが可能であろう。

表からは、つぎの四つの特徴が看取できる。

(一) 刊行時期は一二三世紀以降であり、一二三世紀は少なく、

一四世紀後半からは急増の傾向にある。

(二) 開板者は、分司大蔵都監が五点のほか、他は寺刹版で、民間の開板はみられない。

(三) 開板のテキストは、覆元版・覆宋版を含めて重刊が多い。

四、個々のテキストは、『法宝壇経』の開板が群を抜き、

『人天眼目』『高峰和尚禅要』がこれにつぐ。

まず、(一)にみられる傾向は、半島における宋元版禅籍の開板が、一三世紀を期として活発化する状態を示す。もちろん、時代的に古いものよりも新しい書物の残存率が高いのは当然であろうが、一三世紀後半からは漸増を示し、一四世紀後半には急増を示している。かかる傾向を生じた理由は、九山禅門の再編と曹溪宗の興隆、麗末における戦乱と李朝初期における太祖の崇仏、などの内外にわたる歴史的背景による結果であったと思われる。

(二)の特徴は、開板者に関する点である。二二種二九回の開板中、分司大蔵都監による開板が五回、寺院なることが明瞭なもの一七回、他は不詳である。分司大蔵都監とは、知ることく、大蔵経再雕の際に慶昌道南海島に設置された国家機関であり、後に統蔵の補版として同治四年(一八六四)に入蔵する章疏類一五種の雕造に当った。これら補版の板木が伽倻山海印寺の蔵経閣から発見されたのは、わが大正のはじめであり、その間、これらの一五種は、まったく世に流布することのない奇代の逸書であった。

一方、寺刹版の多いのは、半島における仏書出版の通例であり、町版はきわめて稀のようである。⁽³⁾したがって、右表に

における開板者不明のものも、大部分は寺刹版とみられる。

(三)の特徴は、いうまでもなく文献的価値を高からしめる特長であり、古版禅籍の文献研究にとって、きわめて有益な資料となるものである。この問題については、次項で改めて問題にしたい。

(四)の特徴は、半島の禅界が求めた禅籍の傾向を知らしむる点で、興味が深い。就中、『法宝壇経』(六祖大師法宝壇経)は曹溪宗にとって、特別なテキストであった。すなわち、宗祖普照国師知訥(一一五八—一二一〇)が開いた曹溪山修禅社の名は、曹溪慧能の故地に由来し、知訥みずからこのテキストによって自得・開演をなし、⁽⁴⁾跋文を付して開板せしめるなどの事蹟が、これをものがたるものである。

その他、『人天眼目』は李朝以後には、あまり開板されなかったようであるが、『高峰和尚禅要』は、『禅源諸詮集都序』や『大慧書』などととともに、半島では後代まで版を重ねる代表的な禅書であった。⁽⁵⁾概して、高麗期における大陸禅籍の刊行は多彩であり、その吸収・普及に熱心であった様相が知られる。

三 宋元版の重刊問題

前項の「刊行年表」にみえる第三の特徴、すなわち、高麗版の宋元版重刊の問題について考えたい。周知のとうり、高

麗版の中国書は、一般に原本に忠実であるといわれる。かつて、朝鮮文化史の専門家、奥平武彦氏は、宋元明版の半島重刻本について、(一)中国板本を版下としてそのままを模刻した覆刻、(二)朝鮮活字に移植した鑄字本、の二種に大別している。⁽⁶⁾いま、右に表示した中国禅籍の場合はどうであろうか。

なるほど、刊記等において、明らかに重刊(再版)ときき、中国の底本の刊記そのものをとどめる書は少なくない。しかし、かかる麗版の底本たるべき宋元版で、現存する書は皆無である。また、兄弟関係にあるべき五山版の存在も、これまた暁天の星にすぎぬ。のみならず、根本的に各国に散在する麗版を閲覧すること自体、大半は困難な現況にある。宋元版や五山版に比して、麗版禅籍の絶対量がはるかに少ないため、これはかなり困難な問題である。

しかし、古版研究の推進のためには、こうした困難性の中で、可能な限りの努力がなされなければならない。すなわち、高麗版の文献的特徴を知るためには、現段階としては、閲覧可能なものから、他の異版類との総合的比較を進めるほかはないであろう。

かくして、当面の二二種の禅籍中、筆者がすでに目睹しえた書、および、すでに先学によるテキストの研究や紹介により、宋元版との関係に言及可能なテキストは、約半数である。以下、該当する箇々の書について、この点に焦点を当て

てみよう。

a、祖堂集

本書は、半島が初刻であり、宋版は存在しない。したがって、麗版は覆宋版ではない。ただし、本書が五代の保大一年(九五二)に成立した当時の本文が、三〇〇年を経た半島で印刻されたのか否かについて、筆者はかつて疑義を呈したことがある。⁽⁷⁾この問題については、なお詳細な検討を将来に期したい。

b、護法論

本書は大屋徳城氏の旧蔵であるが、目下所在は知られない。ただし、黒田亮・大屋徳城両氏の紹介により、その概要は把握できる。筆者は、本書の元版(内関文庫蔵)や朝鮮本(駒大蔵)・五山版等との比較検討により、麗版は忠実な覆宋版との結論をえた。⁽⁸⁾

c、金剛経川老註

本書は、諸異本中、川老の頌と著語のみを骨子とし、宗泐の新注を含まぬ簡潔な内容である。巻末には、紹興三一年(一一六一)、本書を初刻した際における鄭震の跋と、慶元四年(一一九八)に重刻した際に書いた天演の跋を、それぞれ収める貴重本である。つまり、本書の麗版は宋版初刻の体裁と古型を有するものと思われる。

d、禅苑清規

本書は、大屋氏の旧蔵書で、現在は泉岳寺の所蔵となったが、所在目録に載せた紹介により、すでにテキストとしての性格は明らかにされている。すなわち、本書は北宋政和元年（一一一一）重添本を南宋宝祐二年（一二五四）に重雕した書であるが、現存する宋版（東洋文庫蔵）がより古い嘉泰二年（一二〇二）の重彫補註本であるにもかかわらず、巻次構成や内容が古型・素朴である。つまり、麗版は補註がなされる以前の、おそらくは初刻本の古型を有する貴重本である。

e、禅家宝訓

本版は、明蔵本や正蔵本が四巻であるのに対し、二巻の構成である。しかも、内容的に差異があり、明蔵本等における末尾の五項目を欠く。巻末には、至正一四年（一三五四）永中の識語、板留長蘆禅寺印行の原刊記、至正二年（一二六二）錫山尤袞の跋、宣光八年（一二七八）の刊記、等の独自の記事を有する。つまり、本書もまた、元版の忠実な覆刻であり、明蔵本等よりも古型を保持するとみられる。

f、景德伝燈録

本版は閲覧していないが、筆者は後代の朝鮮版によって内容検討をなした⁽⁹⁾。朝鮮版は、他の諸版に比して内容的な差異のいちじるしい注目すべき異版である。その相違部分が半島における改編版にもとづくか、または、すでに大陸における改編版の重刻であるかが問題である。筆者は前者を推定した

が、最近、後者の立場をとる西口芳男氏の説がある⁽¹⁰⁾。現存する宋版各種、および麗版と密接な関係をもつ『五燈会元』との貸借関係など、今後なお検討を要する文献である。

g、大蔵一覽

本書は、高麗再雕大蔵経における補板の一であるから、やはり分司大蔵都監の刊行と思われる。序跋なく、門目総類の次に、「建安劉五三郎書局刻梓以伝」の一二字を刻する。おそらくは元版の原刊記であろう。明蔵本に比較すると、目録の記載が詳細である。本邦江戸期の木版本には、紹興二七年（一一五七）の王令衿による序と撰者陳実の序を有し、目録等の記載は麗版に等しい。したがって、麗版は宋代の序を省いた元版にもとづく覆元版と考えられる。

h、人天眼目

本版は上中下三巻中、目下のところ上巻しか閲していないが、至正一七年（一三五七）刊の元版からの重刻本である。内容的には、もっともよく整った五山版、やや雑然たる明蔵本等に比して、雑然の度は大きく、分量的にも最大である。すなわち、未整理の宋版に近い原型を有する一本とみられる⁽¹¹⁾。

i、法宝壇経

本書についてはすでに先学の研究が少なくない。泰和七年（一二〇七）の知訥重刊本は底本が不明とされるが、他の朝鮮本諸版は、宋代の蒙山徳異の編集本を踏襲しているといわ

れる。

以上、二一種中、半数ほどの典籍について、宋元版との関係を見たのであるが、『祖堂集』を例外として、いずれも宋元版（または前代の麗版）に忠実な覆刻本とみられるものであった。それは、内容的にテキストの良否には関係なく、もっぱら前代のテキストを重視する姿勢が貫かれている。この点、やはり宋元代の覆刻といわれる、わが五山版の中国禅籍に有する姿勢と、まさしくおなじ立場にある。

半島における仏典刊行は、後代にも同じ傾向をたどるといふ。一方、わが江戸期の刊本は、新たな編集・改編が普通である。かかる相違の生ずる理由を考えるにつけても、中世における半島と日本両国禅界の、中国禅籍に対する共通な態度はけっして偶然ではない。そこには、中国禅の輸入・摂取に対する共通の根本理念が作用していたからであろう。こうした問題は重要であり、禅宗史全体の問題であって、一概に論じられないが、いまは麗版のもつ意味について小考することとどめ、これも将来を期さなければならぬ。

(1) 高麗の崇仏状況を知るべき基本史料には、権桐老編『高麗史仏教抄存』（一九七九年五月、ソウル宝蓮閣刊）があり、研究書は江田俊雄『朝鮮仏教史の研究』や中吉功編『海東の仏教』第二編などがある。特に禅宗に関しては、忽滑谷快天

高麗版禅籍と宋元版（椎名）

『朝鮮禅教史』第三篇が詳しい。

(2) 大屋徳城「朝鮮海印寺経板攷」（『東洋学報』一五―三）参照。

(3) 黒田亮『朝鮮旧書考』の内、「朝鮮仏書に就いての総合的考察」参照。ただし、奥平武彦「宋元明板覆刻本」（『書物同好会会報』六）では、私家版の至大二年（一三〇九）刊『楞嚴経』一〇巻二冊本を紹介している。

(4) 「海東朝鮮国湖南路順天府曹溪山松広寺贈諡仏日普照国師碑銘并序」（『朝鮮金石綜覧』下）

(5) 黒田亮前掲書中、「朝鮮仏書に就いての総合的考察」にみえる「刊記附刻朝鮮仏典目録」参照。

(6) 「宋元明板覆刻本」（『書物同好会会報』六）

(7) 拙稿「『祖堂集』の編成」（『宗学研究』二〇）

(8) 「護法論」の諸版とその思想的基盤」（『曹洞宗研究員研究生研究紀要』一〇）

(9) 「朝鮮版『景德伝燈録』について」（『駒沢大学仏教学部論集』七）

(10) 「高麗本『景德伝燈録』について」（『印度学仏教学研究』三二―三）

(11) 拙稿「『人天眼目』の諸本」（『宗学研究』二〇）

※脱稿後、昭和五九年八月一七日の中外日報によれば、八月二日、韓国で次の高麗版仏典五種が初めて学界に公開され、大きな関心を呼んだという。①『義湘和尚投師礼外』（関泳珪氏所蔵）、②『宗門円相集』（高宗六年八一二一九刊、趙明

基氏所蔵）、③『永嘉大師妹浄居證道歌』（一二一四？刊、四
四片、同氏所蔵）、④『宗門摭英集』上中下三卷三冊、（文宗
二八年八一〇七四V刊、同氏所蔵）、⑤『海東曹溪心庵和尚
雜著』（七六片、関泳珪氏所蔵）。これら五種のうち、①以外
は禅籍であり、③④の二種は中国禅籍である。高麗志謙の撰
述である②については、昭和五九年七月に韓国春川市の江原
大学校で開かれた第六回国際仏教学術会議で、趙明基氏が
「新羅の順之と高麗の志謙の禅思想」と題する研究発表をさ
れ、その中でこの『宗門円相集』を紹介している。論文の内
容は、中外日報の八月一五日号に掲載された。